

(様式3号)

## 修 士 論 文 要 旨

看護学専攻	生涯看護学 分野 母性看護学 領域	学籍番号 214602 氏 名 高橋 恭子
論文題目	第1子を予定帝王切開で出産することが妊娠中期までに決定した女性の 出産までの体験 ―女性自身の語りから―	
キーワード	第1子、帝王切開術、出産、体験、妊娠中期	
<p>【背景】 年々帝王切開での出産が増加傾向にある。緊急帝王切開とは異なり、予定帝王切開は出産に至るまでの間に帝王切開への予期的悲嘆作業を行う時間的余裕があるとされているが、妊娠期の看護介入についての報告はほとんどない。予定帝王切開で出産することが妊娠中期までに決定する女性は、親になる準備と帝王切開に対する予期的悲嘆作業を同時に行うことになるため、女性自身が帝王切開となることをどのようにとらえ、出産までにどのような体験をしているのか女性自身の語りから明らかにする意義は大きい。</p> <p>【目的】 第1子を予定帝王切開で出産することが妊娠中期までに決定した女性の出産までの体験を女性自身の語りから明らかにする。</p> <p>【研究方法】 研究協力者は、予定帝王切開で第1子を出産した女性（多胎を除く）とし、初めての出産を条件とした。妊娠中期（妊娠28週未満）までに帝王切開で出産することが決定していた女性で、出産後1～2ヵ月程度経過し母子ともに順調な経過をたどった7名に対し、半構成的面接によりデータ収集を行った。逐語録を作成し、予定帝王切開であることによる体験についての語りに着目して意味内容を整理した。帝王切開での出産が決定した時、妊娠中および出産に至るまでの体験に関する意味内容をコード化し、サブカテゴリーを抽出し、類似性と異質性にもとづき、カテゴリー、コアカテゴリーを生成した。データ分析および解釈については、母性看護学、質的研究の専門家のスーパーバイズを受けた。なお、本研究は三重県立看護大学研究倫理審査会、および研究協力施設の倫理審査会の承認を得て実施した。</p> <p>【結果】 予定帝王切開で出産する女性は、帝王切開での出産となることを自認しながらも、『経膈分娩へのこだわり』を持ち続けていた。『児が安全に生まれることへの祈り』を抱きつつ『帝王切開で生まれる児への申し訳なさ』を感じていた。また、妊娠中期までに帝王切開での出産が決定していることから、『周囲との関わりで生じる気持ちの揺らぎ』を実感し、帝王切開に備えて『納得できる情報を得たい』と願っていた。帝王切開での出産が決まっているとしても『通常受けられるケアを受けたい』と望んでおり、『帝王切開での出産を受容しようとする』体験を繰り返し、迫りくる『帝王切開を現実のものとして捉えることで生じる情動』を実感していた。</p> <p>【考察】 予定帝王切開で出産する女性は、帝王切開での出産となることを自認しながらも『経膈分娩へのこだわり』を持ち続け、『帝王切開で生まれる児への申し訳なさ』や『周囲との関わりで生じる気持ちの揺らぎ』などを実感しており、妊娠中に親になる準備と同時に帝王切開への予期的悲嘆作業を行う上での困難を抱える可能性が示唆された。出産体験のとらえ方は個々によって異なるため適切に把握し、出産までの間に女性の心理状況に応じた情報提供や精神的ケアを行うことが看護の役割であると考えられる。</p>		

